

## 個別のスポーツに対するスポーツ美学の応用

### —— 野球の文化的背景で語られる「美的性質」をめぐって

根岸 貴哉 (立命館大学)

---

本発表では、スポーツ美学を特定のスポーツである野球に適用することを試みる。

これまで、スポーツ美学は、中井正一や、樋口聡らにより展開されてきた。そこではスポーツにおいて美学は「可能か」、あるいはスポーツは芸術たりえるか、そもそもスポーツは芸術であるかといったことを中心に議論されてきている。そのため、「スポーツ全体」に焦点があたり、具体例の一つとして個別のスポーツが挙げられることはあっても、特定のスポーツに対して議論がされる、ということはいえない。

スポーツに目を向けると、いわゆる「芸術点」などを競う「アーティスティック・スポーツ」と呼ばれるものがある。しかし、「アーティスティック・スポーツ」における「芸術点」は、ルールブックに一定の規定がある場合がほとんどである。

それに対して、野球のプレイには「芸術点」のようなものはない。にもかかわらず、野球をはじめとした、アーティスティック・スポーツに該当しないスポーツでも、「美しい」であるとか「芸術的」といった言及がなされるプレイやフォームがある。それは、既存のスポーツ美学が指摘してきたような「技術美」、あるいは「機能美」としての側面もある。特定のスポーツに精通していない者がみても、「美しい」、「芸術的」なプレイはあるのではないだろうか。その一方でそのスポーツに精通していない者にとっては、理解ができないプレイもあると想定できる。それは当該スポーツ独自の歴史観や、文化的観点によって、対象となるプレイや動きに対するまなざしが変わる、ということではないだろうか。換言すれば、当該スポーツに対する知識がなければ、そのプレイを正当に評価することが難しい。あるいは、そのスポーツの歴史や、特殊なコンテキストに配置することによって、はじめて意味と価値が理解できることもあるだろう。

その点、野球は、日本において人気が高く、またその歴史においても一定の蓄積がある。くわえて、時には——「武士道野球」のように——日本文化と結びついたような表現がなされることすらあるという意味において、特殊なコンテキストがあることがすでに指摘されている。そうしたある種の文化的背景が、機能美を時として取り上げ、報道するマス・メディアや創作物によって、強調されることもあるだろう。また本発表では、特定のスポーツの実践者（プレイヤー）ではなく、観戦者に注目する。すなわち、実践者がプレイを行う際の感覚ではなく、多くの人々にそのスポーツが、あるいはプレイが、どのように観られているのかについて考える。

以上を通して、「野球の美学」をはじめとした、特定のスポーツにおける美学の応用可能性と、そのスポーツ固有のコンテキストのうちで語られ、共有されている特殊な「美的」な性質や価値、あるいは「芸術的」と呼ばれる概念について、明らかにする。